

堂島川、東横堀川、道頓堀川、木津川、そして歴史へ

濃密な時空間を求めて、小さな船旅

大阪について新発見したいなら、市内を巡る“水の回廊”を船で一周することをお勧めする。“水の回廊”は、船場や島之内、堀江など江戸時代からの大阪市街の東西南北をぐるりと囲んだ川筋のことで、北は中之島を囲む堂島川と土佐堀川、東は東横堀川、南は道頓堀川、西は木津川である。

以前も紹介した、大阪大学総合学術博物館が社会人に開講する文化芸術ファシリテーター育成講座「記憶の劇場」で私が担当する今年のテーマが、大阪の橋である。市内に張りめぐらされた運河をまたぎ、街をつなぐ橋の存在感を実感するため、受講生たちと“水の回廊”を船で一周した。

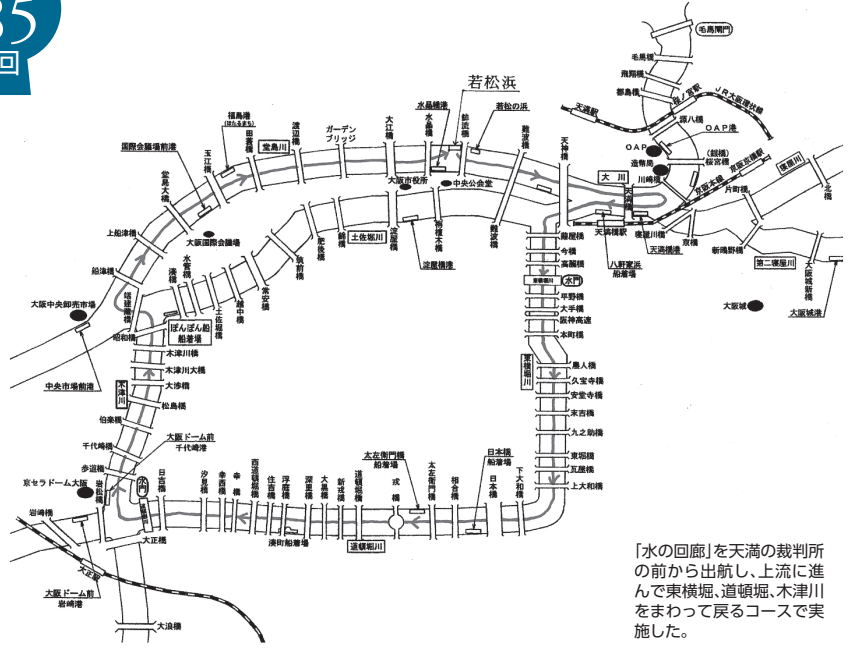
モータリゼーションの時代だが、洋画家・小出楯重の「絵日記」などを開くと、近代でも大阪には川を航行する水上バスが日常的に用いられており、船での移動の方が早いこともあったらしい。

天満の裁判所前の栈橋をスタートに、難波橋、天神橋、天満橋の“浪花三大橋”を過ぎ、船は上流に進んでいく。街の表情は刻々と変わり、川面から見あげるといつもと様相が異なる。活気に満ちた橋や寂しい橋もある。潮の干満で下をくぐるとき頭を思い切りさげないといけない橋もある。

東横堀川は、高速道路の橋脚のために薄暗いのが残念だが、今橋、高麗橋、本町橋などには歴史が濃縮されている。近くに住友本宅もあった末吉橋は、豪商末吉孫左衛門ゆかりの橋で、近代に市電を渡すため豪華な橋となった。船場を過ぎると島之内になり、芸能や小説の話も増えて、同じ東横堀川の鉄橋でもどこか可愛らしい。九之助橋は落語「らくだ」ゆかりの橋、瓦屋橋の西詰めには文楽のお染久松の油屋があったとされる。

上大和橋でグルリと舳先を西へむけ、道頓堀川にはいった最初の下大和橋には、北詰に近松門左衛門「生玉心中」に登場する茶碗屋の喜平次の店があり、南詰には『鬼平犯科帳』で平蔵と対決する盗賊「高津の玄舟」の宿屋があった。初代桂春団治が、親の厄年のゲン担ぎの迷信で、捨て子として捨てられたのもこの付近である。

日本橋から相合橋を過ぎて、太左衛門橋では、ジャズの街であった道頓堀を復活させるべく、デキシーランドを演奏するクラリネット奏者の吉川裕之



「水の回廊」を天満の裁判所の前から出航し、上流に進んで東横堀、道頓堀、木津川をまわって戻るコースで実施した。

さんのジャズボートともすれ違った。

道頓堀川下流には、パナマ運河と同じ原理で水路の高低差を調整する水門があり、門が開くと悠然と流れる木津川に出る。目の前が大阪ドームだ。そこから北に進み、江之子島の大阪府庁跡を過ぎて、モダンな昭和橋をくぐる。中之島の西の端の端建蔵橋は、宮本輝「泥の河」の舞台である。

諸国の蔵屋敷がひしめいていた中之島。いまは、巨大な高層建築が建ち並んでいる。川岸の観光客にみんなで手を振った人なつっこい道頓堀の情景が、記憶から消し飛びそうな圧倒的な景観だ。ビルの重さで島が沈まないかと心配になる。

来年100周年を迎える中央公会堂のレトロな姿にほっとして、走馬燈のように大阪の歴史と文化と空間を廻ってきたことを実感する。

クルーズ参加者が、どのように自分の「記憶の劇場」に架かる橋の世界をまとめるかが楽しみだが、最近、“水の回廊”を巡るツアーもいろいろ企画されているらしく、未体験の方はぜひどうぞ。別世界の大阪——いや、本来の姿であった大阪を体験できるはずである。



中之島に戻って、堂島川を西側から進むと、そこは圧倒的な都市景観だった。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像—』（創元社）など。